

1. 景気動向

前回調査では、業種により若干回復基調の兆しが見られたものの、原油価格の高騰の影響からか特に建設業でのマイナス幅が大きく、製造業はかろうじて横這いを維持している状況である。また、引き続き小売業のD Iのマイナス値が顕著で、景気回復にはまだまだ厳しい企業経営が続くものと思われる。

		建設業		製造業		卸売業		小売業		サービス業	
		7~9月	10~12月	7~9月	10~12月	7~9月	10~12月	7~9月	10~12月	7~9月	10~12月
		今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し	今期状況	見通し
売上高		63	63	7	2	17	33	65	47	8	26
採算		75	69	22	22	31	33	50	44	29	25
資金繰り		44	44	8	20	18	10	32	35	32	31
業況		50	60	11	11	23	8	63	50	0	9
経営上の 当面する 問題点	1位	民間需要の停滞		原材料価格の上昇		需要の停滞		購買力の他地域への流出		人件費以外の経費の増加	
	2位	請負単価の低下・上昇難		需要の停滞		仕入単価の上昇		大型店・中型店の進出による競争の激化		新規参入企業の増加	
	3位	官公需要の停滞		製品(加工)単価の低下・上昇難		販売単価の低下・上昇難		消費者ニーズの変化への対応		利用者ニーズの変化への対応	
業種別 コメント		<p>前回調査時に比べて業況は20ポイントマイナス値が増加し、その他の設問項目でも大幅に悪化している。依然「需要の停滞」がトップで、次いで「請負単価の低下・上昇難」が続いている。材料の仕入れ単価も上昇に歯止めがかからず、来期の見通しも明るい材料が見られず、今後は冬場を迎えることになり、更に厳しい景況が続く見込みとなっている。</p>		<p>売上はわずかながら減少しているが、マイナス幅はさほど大きくはない。しかしながら、今回「原材料価格の上昇」が問題点のトップになっており、この傾向が続くと再び景況は一気に停滞してしまう懸念がある。</p> <p>今回調査では、来期生産設備を予定している企業割合が増えており、今後の受注増加に向けた期待感が現れている。売上を維持しつつ採算面や資金繰りでの経営努力が望まれる。</p>		<p>前期までの横ばい状況から一転し、今期の業況は悪化している。特に採算性、売上高は悪化傾向にあり、年末に向けての見通しも暗い。競争の激化も原因の一つだが、小売業の業況に左右されている部分は大きく、問題点の1位に需要の停滞が上がってきているあたりからも推測できる。</p> <p>業態が今の流通事情、経営環境に対応しきれなくなっているため、商品、販路の見直しを視野に入れた経営革新に取り組んでいかなければ、企業成長は難しいと思われる。</p>		<p>全般的にD I値は悪化しており、特に売上高、業況ともに大きなマイナスとなった。各店とも中元商戦に向けた販売促進を行っているが、今ひとつ消費者ニーズをつかみきれず、特にお盆後の中だるみの影響が大きい。</p> <p>来期見通しも、やや改善する傾向にあるも全体的にマイナス傾向が続く、他地域への消費購買率の流出と大型店等との価格差を問題としている。</p> <p>個性的な店作りにより、消費者への訴求効果を向上させるとともに、商品の充実に併せて消費者ニーズに合わせた取り組みが必要である。</p>		<p>業況のD I値が0ポイントと大きく改善し、売上高もマイナスが大きく減少している。8月に入り天候が回復し、お盆頃を中心に来客数の増加など、季節的要因も手伝って改善した。しかし、原油価格の高騰からコストの増加により、採算面では難しい面もある。来期見通しでは、行業需要や年末に向けての個人消費が期待されるが、今期の反動が懸念され、全般的にマイナス傾向と予想している。</p>	

*表中の天気図はD・Iを以下のように分類したものです。

とくに好調 (50 DI)	好調 (25 DI<50)	まあまあ (0 DI<25)	不振 (25 DI<0)	きわめて不振 (DI<25)

当所では分析にあたってD・I(好転したとする企業割合から悪化したとする企業割合を差し引いた値)を採用しました。